

CHEMíRO

創刊号

特集 Tシャツ

Tシャツスナップ in 大阪

いまだき女子のTシャツ座談会

Tシャツコラム

取材

コミュニティカフェ・バンゲア

豊能障害者労働センター

巻頭インタビュー 小原啓渡さん

連載 探訪記「直島」／コトハ寫眞

いっだって
心はざわついて
もどかしくって
たまらない
落ち着かない
そんな風だ
それでいい
きらきら
よりも
きらきらと
強く
輝いていたいんだ

contents

p.2 探訪記「直島」

p.3 先輩、いってらっしゃい

巻頭インタビュー：小原啓渡さん

p.7 Tシャツから紐解くカフェの心意気

コミュニティカフェ・パンゲア

p.8 コラム壱『映画の中のTシャツ』

p.9 街頭スナップ

p.12 Tシャツについてしゃべる会

p.15 Tシャツにメッセージをのせて

豊能障害者労働センター

p.18 コラム弐『英雄ティーシャツ』

p.20 Tシャツあれこれ

GWの始まり、高校時代からの友人たちと3人で、香川県直島へ観光旅行に行ってきた。直島は様々なアーティストの作品がある、自然と歴史とアートの島。朝の天気は生憎のくもり気味。おひさまがさんさんとしてくれることを願いつつ、京都から新幹線で岡山駅へ向う。9時30分頃に到着し、ここから宇野駅までは、マリライナーという青色の2階建列車に乗車。ホーム上では駅員さんが手を振ってお見送り。なんか旅っぽい。宇野駅から島まではフェリー。せっかくなので甲板に上がり、瀬戸内海の空気に触れる。ここでようやくおひさまが登場。さすがハレ女、私。風も爽やかで気持ち良い。泊まったコテージは、昨年出来たばかりらしく内装も設備もとてもキレイ。荷物を置いて、いざ島探検へ！

1日目はレンタル自転車で快適に移動。しかし超運動不足のOLの太もも。登山だと丘程度のレベルであろう上り坂ですら苦悶の声である。夕方まで「家プロジェクト」※の作品を探しながら本村を散策した後は、ベネッセハウスミュージアムへ。ここでは「発見」をいっぱい体験できた。作品は島と対応していて、作品の材料に島のものが使われていたり、美術館の外の海岸に、中で見た絵の光景があったりする。屋外作品は探しながら歩いていたので、見つけることが出来たものもある。これから行く人は、ガイドブックを見てから訪れるのが正解だ。



制作体験をした、とんぼ玉。



赤く燃えているのがとんぼ玉。



好きな色の組み合わせができる。色によって強度も様々。



島の中には作品がたくさん！

直島探訪記

文・写真 Nao



展望スポット！



マリライナー



翌朝、あの有名な安藤忠雄氏設計の地中美術館へ。混雑を避けようと開館前に着こうと出発したが、まだ現地まで行くバスもない。仕方がないので歩いて向かうとしていた途中、通りかかった案内所で係りのおっちゃんに話しかけられ、ちょうど自分もそっちに行く用事があるというので、車に乗せてもらえることになった。ついでに観光客にあまり知られていない展望スポットまで案内してくれた。さらに本日の天気予報は雨のはずだったが、朝からずっと晴れ間が続いている。こうラッキーが重なると、勝手に島に歓迎されている気分になる。地中美術館はその名の通り、地下に埋まっている美術館。コンクリートの建物の中には、靴を脱いで入る作品などもある。随所には、自然採光が降り注ぐ。空間そのものが作品なのだろう。絵だけが並ぶ美術館より、からだ全体で鑑賞するのがワクワクする。

島を出る前、港の傍にある作品の銭湯の前でおばあちゃんがクリアファイルに入れた大きな写真を見せながら、観光客に話しかけていた。この銭湯を手がけた芸術家、大竹伸朗氏と映っている写真。「みてみてこれ、大竹先生！」と、その説明している姿がとても楽しそうで、アートの力を垣間見た気がした。

※「家プロジェクト」
瀬戸内海地方固有の家屋をアーティストと建築家が協力して作品にするプロジェクト。



巻頭インタビュー

プロデューサー 小原啓渡氏

5月26日 京橋

インタビュー：森岡勝彦／写真：呉野和美

「現在、小原さんが館長を務める大阪市立芸術創造館の一室をネットストリーミング用のスタジオに改造、大阪市の全面バックアップのもと、SNO（ソーシャルネットワーク大阪※1）が発足されたばかり。小原さんはSNOを束ねるプロデューサーでもある。」

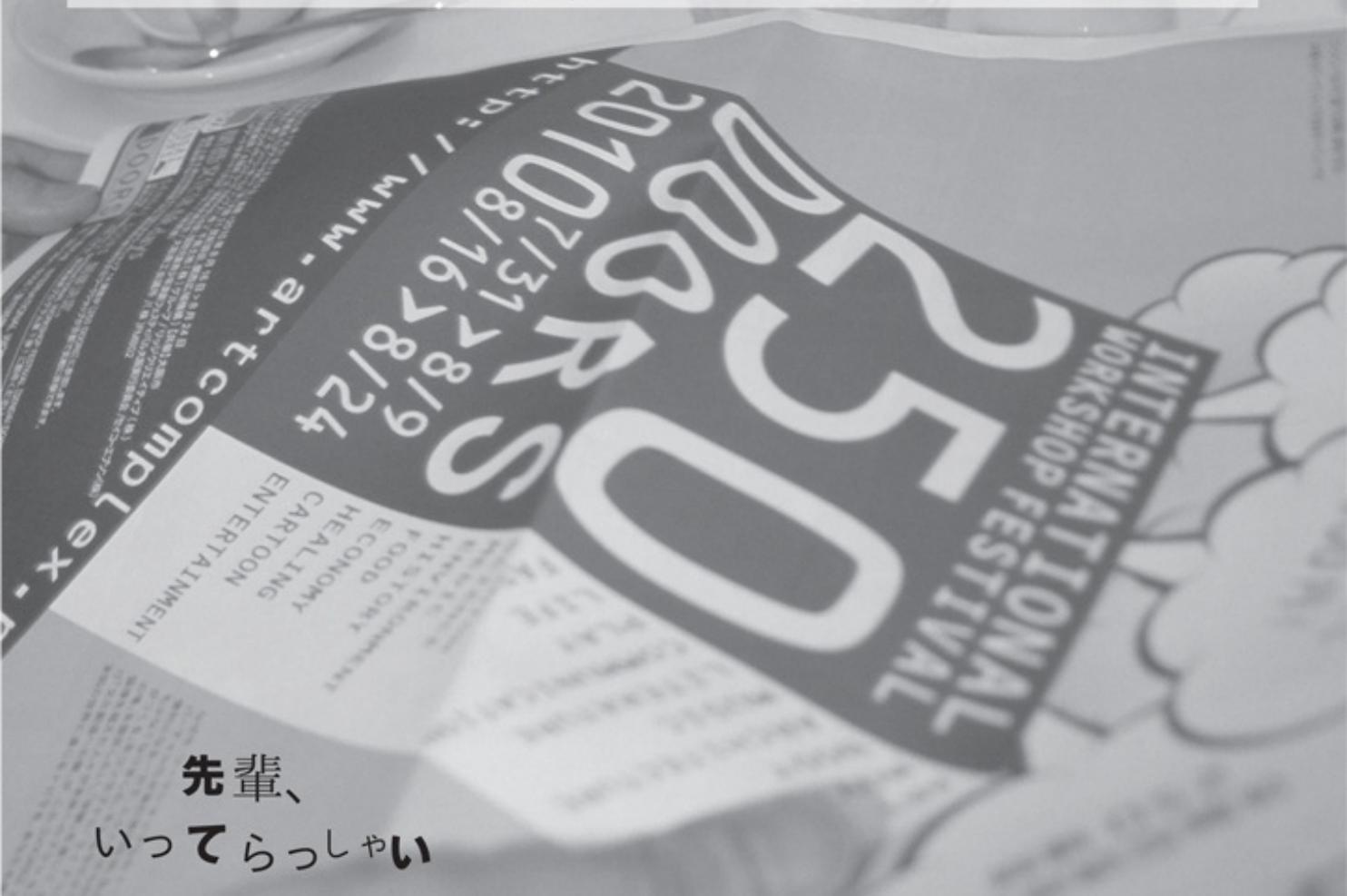
「Ust (Ustream) 中継ならすでにいろいろな人がやっても個々だと目立たない。それを一つに結集することで人が集まるイベントになる Doors※2 というワークショップを集めたイベントで実行したのと同じ。SNOでも番組を集めてテレビの番組表みたいに、月曜から日曜まで全ての時間を埋めていこうと思っている。とにかくSNOにアクセスしたらいろんな番組が見られる。そんなポータルサイトを目指している。」

「SNOのキックオフ・イベント（2011年5月17日開催／パネリストに平松市長・津田大介ら）はニコ生（ニコニコ生放送）や Ust でも生中継され、大きな反響を呼んだ。ニコ生だけで来場者数18800件（コメント7411件）、せいぜい2000〜3000件と推測していた大阪市の職員もみな一様に驚いていたという。」

「ゲストの集客力もそうやけど、やっぱり震災後に Twitter やら Ust が連絡や情報収集の手段として急速に注目されてきたというタイミングが大きかったんじゃないかな。もともと平松市長から若い人に関心を持ってもらおう施策はないかと相談されたのが最初。市長も Twitter やってるんだからソーシャルネットワークを取り入れて若者からの意見の吸い上げを真剣に考えるプロジェクトを始めたらどうですかって答えた。政治や行政って若い子はダサイというか堅いというか、そういうイメージで、何でも後追いでやってるって思ってる。」

※1 「SNO（ソーシャルネットワーク大阪）」…市民参加型のコンテンツ配信サービス。 <http://sn-o.com/>

※2 「Doors」…大阪から世界への文化発信を目的とし、誰もがどのワークショップにもワンコイン500円で参加できる。
<http://www.artcomplex.net/doors/>



先輩、
いってらっしゃい

編集部員Q野の独断により選ばれた人生の先輩に、とある人物を取材してもらい今時の若者についても雑談まじりちょこっと意見をいただくという企画。



だから、世間に先駆けて新しい取り組みをしていったら若い子の行政に対する見方も変わるんじゃないですか、と提案して、ちょうど去年の夏ぐらいに企画が立ち上がって、予算が通ったあとに震災があった。たぶん来年度にはいろいろな取り組みを見せる自治体が増えると思うけど、大阪市は一步先を進んだんじゃないかな。」

「ただ、政治っぽさが前面に出ないように配慮しているという。」

「この仕事を引き受けたときに出した条件がある。それはネタは出してくれ、ただし放送するかどうかはこっちが選びます、みんながおもしろいと思うネタしか拾いません。これはこういう切り口でどう出すかといったことは全部うちでやる。でないと、大阪市のただの広報物になってしまう。そんなんは広報室でやったらええやん、うちですることはない。それを認めてくれないのならやりません。だけはきっぱり言った。でも大阪市職員の間で、大阪市のなかから個々の人にはたくさん出てきて面白いことやってほしいとは思っていますよ。」

「SNSのなかでも twitter 等 SNS の使い方について議論が出ているという。」

「ネットサーブیس全般に言えるけれど、知らない人に対して、使い方に限らずメリット・デメリット含めてちゃんと教えないといけない。まだ普及して数年、なりすましとか流言の拡散とかいろいろ批判されてるけど、みんなおそれるおそれる使ってるサーブیسに成熟した

リテラシーを求めても仕方ない。失敗を経験することで学んでいくんだと思う。いずれはネット選挙をやるべきだと思はる。とか。iPhone から選挙できるようにする、とか。今まで何十人かの小さなコミュニティでは直接選挙、大きくなると代議制になるというふうになってたけど、いまや、一人一人の発信をポトムアップ式に集約する情報インフラがネットを通じて整備されて、直接民主主義が技術的には可能になってきている。若い人たちの無関心も、こうした技術によって政治がもっと身近になれば解決できると思う。行政はそういう時代がやってくることを見越して、いまからソーシャルネットワークシステムに対して関わっていくべきだと思ってる。」

「最終的には30分・一棒千円とかで売っても、それだけの費用で発信できるのならやろうかという人が出てくるかもしれない。ひとつのフレームをちゃんと作ってあげてそのフレームをみんなが使えるというシステムを維持していくつてのが俺のやってきたこと。俺はやっぱり「プロデューサー」って日本語で何かって言うたら「仕掛け人」やと思ってるので。」

「『プロデューサー』。小原さんが現在の幅広い企画に関わるポジションになるまでにはいくつものきっかけがあった。大学3年の頭に失恋、もう何もかも捨てたれ、と退学届を出し単身インドに渡った小原

さんは、インドで1年、その後ネパールで半年くらい過ごすうちにふと、ヒマラヤに登ろうと思った。新田次郎の山岳小説を愛読していたので、登ったこともない冬山に一人でチャレンジした結果は、遭難。

「知識だけでなめたら、えらい目に会うっちゃう例だね。ツクチェビークって行って5000メートルクラス。夜にすごい吹雪に出会って、歩けなくてビバーク（緊急的な野営）するしかなくなった。もうあかんやんと思ったとき、たまたま真夜中に吹雪がやんで、空が晴れたわけ。そのときにフルムーンの月が出てて、一面雪のなかまるで昼間のような明るさだった。それで俺は歩けた。」

「その光景が忘れられず、小原さんは日本に帰ってきてから、光に関係する職業を探し始めて照明技術者になった。」

「転機となったのは、コンテンポラリーダンスの母と呼ばれるアメリカのアーティスト、スーザン・バージュとの出会い。彼女が振付家としてカンパニーを立ち上げる際に、小原さんをテクニカルディレクターに抜擢したのだ。だが、転機はまたも訪れる。

小原さんの元に射した、

一筋の光。

歩き出した先に訪れた、

出会いと転機。



「あるとき、世界で三本の指に入るというパリの照明家と同じ作品をプランすることになった。よくヨーロッパで夏の期間というのは野外でフェスティバル形式でやるんだけど、たまたま同時期に二ヶ所で新作公演が決まった。僕一人で両会場のプランをやるのが無理で、一方を彼がプランすることになった。俺の方が先にやって自分のやった明かりを知ってる状態で彼の明かりを観たら、もう衝撃だった。根本の発想から全然違う。俺も照明やったらアカンなと思った。それでプロデュースの方向に入ってしまった。」

「日本で落ち着いて仕事をしようと思ったときに、こんなんあるけどやらへん？と誘われて、ちょうどそういうことがやりたかったので始めた。あそこが一番最初になるね、劇場とかスペースのプロデューサーとしてやったのは。どうしても、照明だと全体じゃない、たとえば演出家の意向があったり振付家の意向があったりとかプロデューサーの意向があつて、どうしてもそれに答える仕事になるけれど、プロデューサーというのは一番最初から全体を仕切っていくところが面白いと思ってる。俺はスペシャリストというよりもジェネラリストだと思ってる。俺が舞台監督でスーザン・バージュに買われたのは照明の技術というよりも、舞台全体をコーディネートしたりアレンジしたり、みんなをまとめたりする力を見込まれたんだと思う。スタッフの中で日本人は僕だけ、周りみんなな

外国人のなかで何とかうまくやってこれたから、ジェネラリスト的に全体をまとめていくのが得意なんだと思う。」

「小原さんは自身の方法をこう語ってくれた。」

「珍しいよね？プロデューサーで職人あがりの人は。自分は元々がスペシャリストだったから、スペシャリストの考え方とかスペシャリストの気持ちとかやりかたがある程度わかっているなかで、それをまとめあげようとする。それが強みかもしれない。スペシャリストってどうしても専門性を追求していく」

「自分の炎は自分でしか燃やせないけど、そのきっかけを与える存在に自分がなれたらいいな、と思う。」

方向ではなくて、枠を外していくという方向ですべてを考える。いろんなものをジャンルに分けていくのではなく、ジャンルの枠みたいなものを外して複合させていくことによつて展開するやり方が俺のやりかた。だから、アートコンプレックス（芸術の複合）という名前をつけているというのもある。」

「最後に、若い世代とも嘘なく正面から向き合いたい、そのためには、逆に、最初から若者向けに限定したサービスをやるのは考え方として嫌いだときっぱり言う。」

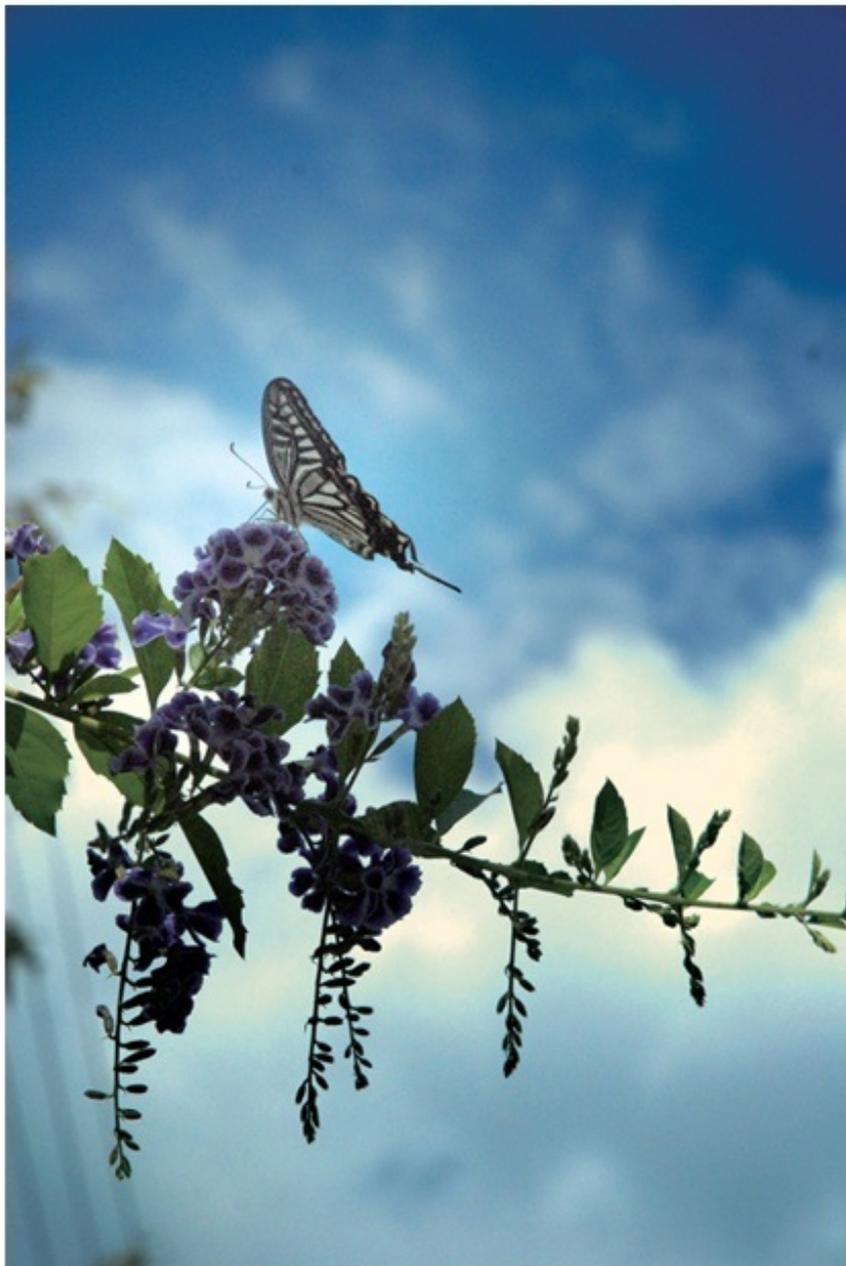
「ただ、大阪市としては若者に届けたいという思いがある。それはクライアントの意向として尊重する。でも、個人的にはそういう方向で隔たりを作るのではなく、もっと普遍的なものを求めている。自分の仕事は金儲けのためだけにやってるんじゃない。自分が社会に対してできる何かを残したい、何か影響を与えたい。社会のためというより、自分自身のアイデンティティのために働いて、それが多くの人に喜ばれると最高だね。実はどんな人でもみんな強い思いを持っていて、その思いが燃え上がれば情熱になる。人間は生きている限りエネルギーの塊だけど、どっかで燃っている人が多い気がするな。自分の炎は自分でしか燃やせないけど、そのきっかけを与える存在に自分がなれたらいいな、と思う。」

小原啓渡（こはら けいと）

大阪市立芸術創造館館長。1999年、京都にて「アートコンプレックス 1928」を立ち上げプロデューサーを務める。大阪の造船所跡地をアートスペース「クリエイティブセンター大阪」に再生する名村造船所跡地の実行委員会代表・プロデューサー、「水都大阪 2009」ではディレクターとしてアーティストである Florentijn Hofman フロレンティン・ホフマンを誘致し堂島川に巨大なアヒルを泳がせる「ラバーダックプロジェクト」を実現した。

インタビュー：森岡勝彦（もりおか かつひこ）

とある会社の印刷部営業。部下である Q 野の懇願により、インタビューを担当。冷静沈着・無駄なし・不言実行の男。日本の時事に異常な関心を持つ。近頃、最も関心のあることは「原発問題」。



Qno

Tシャツ特集
はじまり、はじまり



コミュニティカフェ・パンゲア
Tシャツから紐解く
 カフェの心意気

コミュニティカフェ・パンゲアのオーナー、湯川まゆみさんに、スタッフTシャツについてお伺いした。

Tシャツは、2010年堺の東北ニュータウンで行なわれた「みどりのつどい」のフェスに出店した時にできたもの。

ずばり、誕生秘話とは？「ん〜デザインをスタッフが遊びで作ってくれて、Tシャツも勝手に（笑）。」Tシャツは、スタッフが自発的に作ったもの。この自然体がパンゲアの魅力なんですよね。湯川さん、開店当時の忘れられない言葉があるそう「始める時に、どうしたら辞めるかはちゃんと考えときやって言われました。」どこを完成にして、何をもちて潮時とするのか。今年は、方向転換の年になりそうですか？「いや、それが全然見えてなくて。」店をはじめた時から、「人の繋がる空間とは何か」を模索してきた。そしてその模索

はいい意味で、今も続いている。「うちのスタッフって、だいたい一年くらいで人が入れ替わるんです。でも離れてからも気にしてくれて繋がりがあがる。いるメンバーで全然店の雰囲気かわるから飽きやマンネリがないんです。イベントをする時もスタッフや、パンゲアに訪ねてきてくれる人の企画にだいたい任せますね。私は駄目なことは駄目っていうけど、枠を作つてあとは好きにやってみようというか。だからお店にいても、企画を行なう人によってお店の表情が変わるのが面白いんです。」スタッフにとって、パンゲアTシャツを着

ている時は緊張する瞬間でもあるんだそう。

オンとオフの切り替えでいうと、「Tシャツ着ると、オンになる。でも綺麗に着ようって思わなくてもいいし、洗えばいいから気楽で。」と、スタッフの金田実穂さん。

気負いのなきが魅力のTシャツ、一方で店の広告を背負う心意気の証でもある。「釜の飯と一緒に食べる仲間っていうのかな、パンゲアを卒業してもまたこのTシャツを着てくれるのが嬉しいし、これを着ることがパンゲアに関わった人の証のような、そんなTシャツだったらいいと思う。」

人が入れ替わりながらもどこかアットホームなカフェ。Tシャツはスタッフの絆そのものでもある。オーナーの湯川さんが思う「任せる」の原動力とは、「二人でやることの限界ですかね、一人の経験なんてつまらないものだけど、みんなできれば面白いことが出来ると思う。」

パンゲアの居心地の良さは、人と人が繋がることによってできる何かを信じる力が、土台にあるからかもしれない。

◇コミュニティカフェパンゲア
<http://www.pangea-sein.com/index.htm>
 南海本線堺駅から徒歩5分、堺旧港前。
 1階はロフトからの風が涼しい。
 2階は展示スペースになっている。

◇特定非営利活動法人SEIN(サイン)
<http://www.npo-sein.org/>
 “もっと身近に、NPO。”
 地域に社会に、もっと身近にNPOがある社会、もっと普通に開くことができる社会ができればいいなという思いを込めて、堺市内を中心に、市民が自主的に活動を行う活動を応援するNPOです。

インタビュー/写真 呉野和美

映画の中のTシャツ

文・写真 いろは

映画に登場するTシャツ。そのTシャツが物語と関係があるのではないかと探ってしまう時がある。Tシャツの柄や文字に何らかの意味を持たせてしまうことがあるのだ。裏を返せば、Tシャツ（衣装）を使って意図的に意味を持たせることや、その人物を語ることができるのだ。

と、書いてみたところで…凝り固まった文章になりそうな予感がしたのでもう少しゆったりとした方向で書こうと思います。

私は学生の頃、映画に関する勉強を一応していたのでそれと絡めてTシャツについて書いてみようと思ったのです。いろんな映画を見あざって、Tシャツについて書こうと意気込んでみたものの…どう切り口で映画とTシャツを語ればいいのか分からないので単純に、この映画の中にTシャツを見つけたよ！という文章になりそうです。Tシャツをテーマにした映画ならまだしも、そもそも映画の中のTシャツはその物語を引き立たせる要素の一つであって、それがメインじゃない。なので、単にTシャツに注目して見たというお話です。

物語、監督、役者…映画を楽しむ要素はいろいろあります。映画を観る人によっても観方はさまざまです。作品によって注目すべき点もさまざまですが、映画の中のファッションがつつい気になる作品もあります。今回はTシャツ特集ということで、映画に登場するTシャツに注目して映画を観てみることにしました。多少、ネタバレを含みますのであしからず。

もう一度観たいな、と思っていた映画のDVDをこのコラムを書こうと思った時にたまたま借りていたので、この作品の中でTシャツを探してみようと思った。その作品は『ロックンロールミシン』(02)。若者たちがインディーズブランドを立ち上げ、切磋琢磨するというストーリー。服を作るということが物語のベースとなっはいるが、ファッションに注目して観る映画ではない。若者たちの心情が表現されていて、その模様が軸となっている。

会員の賢司（加瀬亮）は仕事も恋愛も上手くいかず、刺激のない毎日を送っている。「人生このままでいいのかな」という漠然とした不安を抱えていた。ある日、高校時代の同級生である凌一（池内博之）に偶然再会する。凌一は仲間たちとインディーズブランドを立ち上げようとしていた。賢司はそんな凌一たちを初めは見ていただけだったが、仕事にも身が入らなくなり、少しずつ仲間の一人となっていくのだ。着飾らない会社員と服を仕事にしたい人たちの対比が面白くて、それが次第に交わっていく様子が描かれる。

この中で登場するTシャツ（衣装）は、その人物がよく表現されている。こういうさりげないことが違和感なく、その人物を見ることができる要素である。賢司がスーツを脱いで、真新しいTシャツを着るシーンがあるのだが、着こなせていない様子が良い。白い半端な丈の靴下に半ズボンという格好。凌一は着古したTシャツにだぼっとしたズボンを合わせて、着こなしている。真新しいTシャツと着古したTシャツというその二人の対比が伝わってくる。インディーズブランドの仲間として椿（りょう）とカツオ（水橋研二）が登場する。椿はあまりTシャツを着ないのだが、カツオはたまにTシャツを着ており、そのTシャツが総柄のものだったりしてなかなかイケてるので注目して欲しい。自分たちでTシャツをデザインして作るシーンもあり、見ていて楽しい。自分たちのブランドのロゴをデザインしたTシャツなのだが、そのTシャツが映画の最後には意味のある「Tシャツ」となる。

この映画の中で、青春はひと夏のものになってしまうという切ない結末を迎える。自分たちの手で作り上げてきたものを自分たちの手で壊す。壊すことでまた始めるという、楽しいだけじゃない映画に仕上がっている。ミシンの音が音楽のように鳴り響き、ビートを刻む。

と、いうことでTシャツに注目して映画を観ようと思っていたのが…久しぶりに観たこの作品が何だか良くて、違うところまでも目がいつってしまったわけです。ありがちな設定かもしれないけれど、キラキラと輝く青春はあっという間で切ない物語になっています。青くさいセリフが多くて、メッセージ性の強い作品が嫌いでもなければぜひ観てください。その青くささもこの映画には必要で、それがいい味を出しています。いろいろと映画について掘り下げたいところですが…。Tシャツという視点から脱線してしまったので、この作品に関してはこの辺でお開きとします。

映画の中にTシャツを探して観てみるとお気に入りのTシャツが見つかるかもしれないし、今まで観た作品も違った視点に注目して観るとまた違う感動が味わえるかもしれません。

『ロックンロールミシン』

製作年 2002年 / 製作国 日本 (120分) / 監督：行定勲

出演：池内博之 りょう 加瀬亮 水橋研二 他



Tシャツ

記念すべき創刊号は「Tシャツ特集」。

Tシャツを着た人々を探すべく、街へ向かった編集部員たち。

そして、知人のTシャツ好きさんにも取材を決行。

慣れない取材にあたふたしながらも、素敵なTシャツを着た人々に出会えました。

スナップに協力して下さった皆様方、どうもありがとうございました。

十人十色、さまざまなTシャツをお楽しみください。



- ①ユウコ (24) / ②会社員
③高校時代の友達が企業したブランド「Bilingual Girl」のTシャツ。



- ①かずや (30) / ②会社員
③奥さんが選んだTシャツ。やんわりピンク色の素材に、裏地のピンクがお気に入り。



- ①J R (38) / ②教師
③剣道部の顧問をしている友人から買った。かっこいいでしょ！



- ①氏名 (年齢)
②職業
③今日のTシャツのポイント
気に入っているところ etc...



- ①かのん (3) ①せりな (6)
③お姉ちゃんが好きなTシャツだから。 ②小学1年生
③絵がかわいい。



- ①サスペンダー (24) / ②コピーライター
③小さい時王様になりたかったから。



- ①あや (23) / ②アルバイト
③オランダのキッズブランドのTシャツ。色とりどりの花柄がお気に入り。

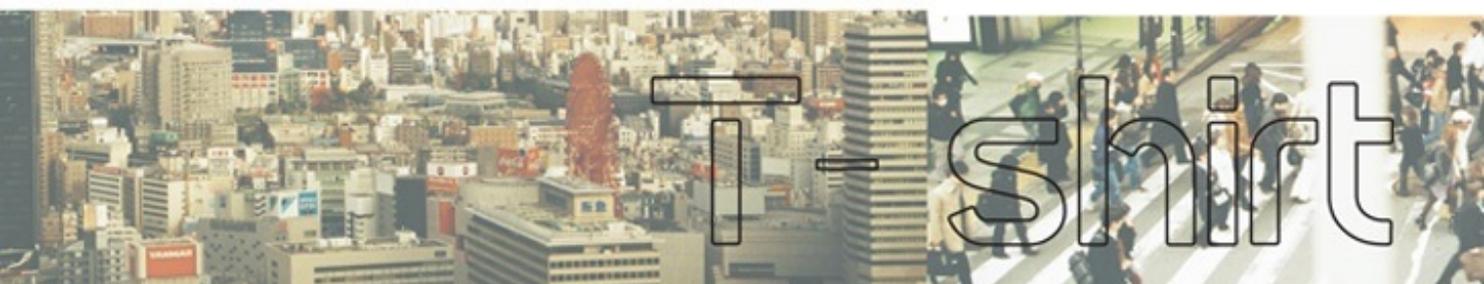
①タカハシ (31) / ②会社員
③バンド、ANATAKIKOU の T シャツ。
ANATAKIKOU の ミシン。



①けいた (5) / ②幼稚園3年
③色がカッコいい。



①なり (27) / ②ダンサー
③指のパフォーマンスをする DIGHITS と
して活動中。手が好き!



①フジト (47) / ②郵便局員
③プーマのプチトマトがおもしろい!



①No.305 (26) / ②店舗経営・バンド
③「双恋」のアニメTシャツ。お店の商品。



①がっちゃん (27) / ②会社員
③干支。

しゃべる会

Tシャツについて

いまだきの女子はTシャツに対してどんな思いを抱いているのか、同世代で好き勝手(笑)に語ってもらいました!

今回のメンバー

◇きのこ(24)ファッション専門学校に通う。

現在就職活動中。

◇タックス(20)ファッション専門学校に通う。

現在は休学してアパレル販売員をしている。

◇沙織(23)社会人4年目。

障害者施設で働く。Tシャツは仕事着。

◇奈央(23)社会人2年目。住宅設備メーカーで働く。

◇Q野(23)社会人2年目。仕事は印刷関係。



☆Tシャツの魅力とは!

きのこ「私はTシャツは嫌いなんです…。」

一同「ええ!」

きのこ「すいません(笑)」。

Q野「まずTシャツの定義がわからないですよね。」

きのこ「ニット素材のものだと思えます。あ、これそうですね(皆の服の生地を触りだす)。これはたぶんカットソーに入りますね、あ、これはTシャツです。」

タックス「TシャツってどこまでTシャツなんかわかりにくいですね。」

きのこ「たぶん一般的なTシャツはこれです(奈央の描いた一般的なTシャツの絵をさす)。」

☆Tシャツの着こなし

奈央「なんか難しくない?Tシャツはシンプルすぎて逆に難しい。それが主張するから。」

Q野「そうか。さおりさんどう思われますか?」

沙織「Tシャツは仕事のとましか着ない。動きやすいから着るけど、仕事着やし1000円以内のものを探す。お金使ったらへんTシャツには!って思う。」

Q野「私はTシャツ好き派やな。1枚着たら終わるから(笑)。ってファッションをなめてるって怒られそう。」

きのこ「いや怒らない怒らない(笑)。タックスは何合わせる?」

タックス「何でも合ます。」

きのこ「ざっくり(笑)。あたしは、よくスカートをハイウエストにして、ちよつと女の子らしく着る。1枚で着るとスポーティに見えることが多いから、それが嫌で。あとは、長めのデザインのものを選んだり、カラータイツや柄タイツを合わせたります。」

くれの「そのまんまTシャツってのが嫌なん?」

きのこ「嫌〜。」

Q野「Tシャツって体操服のイメージあるよな。」

奈央「あるなあ。Tシャツだけで着るんやったら、形とかほんまに気に入ったやつしか着ない。」

タックス「私プリントとか好きなので、気に入ってる絵とかが画かれてたら買いますね。」

Q野「なるほど。目に付くもんな。」

タックス「つけ睫毛つけます(つけ睫毛を装着し始める)。」

☆ファッションへの思いはいつから

Q野「高校はどんな高校を出たん?」

きのこ「実はずっと水泳をやったので、スポーツマンでした。水泳が強い高校に行っていました。スイミングスクールにも通っていました」

沙織「それは本気やな。」

Q野「そのときはおしゃれはできてた?」

きのこ「全然出来なかった。土曜日だけが唯一の休みで。だけど服は好きになり始めてたから、雑誌とか見てめっちゃ研究してた。タックスは服飾の学校に行ってたよな。」

タックス「私は、アートデザイン系列の学校に行っていました。」

☆Tシャツ、なんで嫌いなんやろ

きのこ「襟ぐりがまず嫌いで。なんか締め付けられてる感がある、ここで。あああーってなる。無駄にフィットしてるやんなんか、一般的なTシャツの形は嫌い。形がおもしろいTシャツは着たいけど。」

一同「ははは」

きのこ「Vネックが一番嫌いで。」

奈央「えっVネックも嫌い?」

きのこ「なんで三角なんやろって思う(笑)。」

Q野「あの、韓国のアイドルがよくけっこうピッタリしたTシャツを着てるやん。ものすごい肉体系があれによってこう、なあ、私はたまらんねんけども(笑)。」

きのこ「それはそれでいいと思います、私も。」

Q野「でもまあ、自分が着るとなったらまた別の話やな」

きのこ「そうそうそう、客観的に見るTシャツは、まあ動きやすくて着やすくて誰でも着られるものだからいいと思います。」

奈央「そうやな、運動するときとか、仕事するときとかは、むいてるんやろな。」

きのこ「便利ですよ、あったら。」

タックス「私のお店はストリート系なんですけど、Tシャツめっちゃ売れるんですよ。」

きのこ「確かに、Tシャツめっちゃ着てるイメージあるなあ、ストリー

ト系の人たち。」

奈央「確かに。動くから？」

Q野「なんか文字がけっこう、ぼいこと書いてあるよね。」

タククス「なんか好きなバンドとかのものが売れますね。」

Q野「主張できるからかー。」

奈央「形はこれしかないけど、プリントで色々できるからなあ。」

☆Tシャツの可能性

Q野「就職活動であなたでも着たいと思うTシャツを考えてくださいって言われたらどうする？」

きのこ「まず形変えたいですねー。Tシャツの定義を変えたい(笑)。」

奈央「例えばどんなにする？」

きのこ「襟ぐりはなくて、例えばボタンとかフリルとかがついたTシャツでもいいんじゃないかと思う。全体的に着やすく張りのある綿の生地であっても、ディテールとしてポイントでフリルがあったり、ひらいてボタンがあったりとか、大きいボタンがいっぱい付いててもかわいい。裾野のサイドに紐があつて、かたち変えられるとか、切り替え線を入れて、色を変えるときか、柄を入れるとか、ポケットつけたりとか(机の上の紙に絵を描いて説明)。」

奈央「すごい。アイデアがいっぱい出てきた。」
Q野「加工をいっぱいしていったらおもしろいな。沙織ちゃんは、仕事するときに、別にTシャツじゃなくてもいいと思う？」

沙織「でも、ボタンとか付いたら、ちぎられるかもしれんし、あんまり胸元が開いてた

ら、刺激になるかなとか考える(笑)。」

Q野「なるほど。用途にあった服の作り方は考える？」

タククス「コンセプトとターゲットは考えます。」

きのこ「私の服のコンセプトはへんてこりんな服です。からくりのある服。例えば服が動くとか。」

奈央「レディーガガとかどう思う？カエルついたり、エビフライみたいなのがついてたりしてますよ。」

きのこ「すごい楽しんではるなあと思う。」

タククス「そういうのに刺激されて、派手な服とか着たりするんですか？」

奈央「それはないかな。でも、仕事的时候は地味な色とかしか着れないから、休みの日は反動で色とか柄ものが欲しくなることはある。」

Q野「中学生、高校生のおしゃれしたくなる頃って、ほんまに変なTシャツ買ったりしてた。」

きのこ「確かにTシャツ買ってたなあ、変なプリント柄の...。」

Q野「これまで、服の嗜好とかは変わった？」
タククス「けっこう変わりました。けど服を捨てられない人なんで、どんどん溜まっていつて、中学のころに買った服を今になって着たりもします。けっこうころころ変わるかも。」

奈央「あるある。そのとき着てて落ち着くジャンルってあるやん。フリマとかですごい売りたいもん。」

きのこ「あたしは捨てるか、妹に全部あげる。なんか気付いたらお母さんと妹が家で着てる！捨てるのはいつも、いらん服袋を

作って、はい、これあげるって。」

Q野「再利用できてるなあ(笑)。」

☆無理しない服、Tシャツ。

Q野「なんか、今の社会はTシャツのようだって思うときあるねん。」

奈央「全然わからん。」

Q野「Tシャツのダサさと同じような苛立ちを感じる時がある。」

奈央(笑)。「じゃあやっぱTシャツはダサイって思ってるんや。」

Q野「いやTシャツを着るのもおしゃれやとは思うねん。Tシャツを着るときの、感覚が好きというか。」

きのこ「ゆるいというか、ラクチンな感じ？」

Q野「うん、ラクチン感を、服に求めるから。そういうの求めない？」

きのこ「たまにある。疲れ果てて服にも締め付けられるの嫌になったときは、パジャマみたいな全身フリースの服とか着る。」

☆Tシャツのイメージ

Q野「スーツ着てたら働いているんやなとか、おしゃれな服着てたらおしゃれな人やな、とか服って相手に印象を与えるけど、Tシャツに対してのイメージってあまりないよな。私にとってはそれが気楽なかな。服を着るときに相手に与える印象とか意識する？」

きのこ「私は相手にどう見られているか考えてないです、自分の着たい服を着る、自己表現的な感じで着てます。学校ではいじられます。」

タククス「夏って男の人基本Tシャツってイメージ。」

奈央「そうやなく衿のついた服とかないし、Tシャツくらいしか。」

Q野「より、女子よりプリントにこだわられるかもしれへんな。」

奈央「そうやな、そこしかこだわるポイントがないのかも。それぞれ違うな、Tシャツに対しての思いって。」

Q野「なぜストリートでTシャツが流行ってるのか...。」

タククス「なんか着てるTシャツによって声をかけられるって言っていました。そのバンド好きなんですかって声かけられたり。」

きのこ「わかりやすく、これが好きな人って出るころはありますよね。」

奈央「なるほどね。」

Q野「ゼッケン的な(笑)。」

着る人を疲れさせない癒しの服、Tシャツ。プリントで自己表現をしたり、メッセージを伝えたり。形は一般的なものからデザインものまで。Tシャツは何にでもなる万能な服なのかもしれません。参加してくれた皆様、どうもありがとうございます☆

★ファッションへの思い

きのこ「熱いメッセージを届けていきたい。驚きのある服。ずっと見てたらどこか溶け込んでいきそうな服をつくりたい。それを普段着で着て欲しい。」
タククス「好き。やりがいがあることをしたい。他の人に出ないことをしたい。今、考え中です。」





IROHA

ならんで、歩く



Tシャツに メッセージをのせて

豊能障害者労働センター

現在、豊能障害者労働センターは箕面市坊島に所在をかまえ、障害者スタッフ 37 名、健常者スタッフ 23 名の計 60 名全員が従業員として働いている。リサイクル事業、カレンダーやTシャツの通信販売事業、飲食店・福祉ショップ経営、点訳事業、粉石けんの販売事業、啓発事業を運営している。事業収入のほか、箕面市独自の制度である障害者自身が運営を担いながら障害者の所得を作る場に支給される助成金と、国の助成金を資本としている。

今回は豊能障害者労働センターのスタッフである田岡ひろみさんにお話をお伺いした。

「まず、特殊な給与形態について

「福祉的就労といわれる一般の作業所授産施設では、健常者職員の賃金がまず確保され、障害者の賃金は月棒13000円から20000円。工賃は、製品の売上から必要経費を抜いただけの額です。私たちの障害者事業所では、障害者が自立して生活を送るために月額8万9千円から15万円の給金が支払われます。また、この給与価格は健常者に対しても変わりありません。」

「対等な賃金の支払いは可能なのでしょうか。」

「うちでは、まず財布は一つの原則というのがありますが。これは生活をできるだけだけの給料をわけられているからできることなんです。実際には、同じ分だけ分配することが平等じゃないんです。国の自立支援法の中では利用料と差し引きすると、障害者が自由にできるお金というのは全く残らない事がほとんどですね。そうすると、日常で生活するお金がない。生活する家族がいないと、入所施設以外の選択肢がなくなってしまうわけです。私たちは、最低限度お小遣い程度の工賃だけではなく、障害者の手元に自由に出来るお金が残ることを念頭において全員で会議を行い、話し合いのうえで賃金をわけあうんです。」

「当事者が余暇に使うお金を含めて、人間らしい生活が出来るという事が金額を決める基準となっています。」

「入所したてのときは葛藤がありましたよ。だってお茶を毎日沸かして、やかんに入れる作業を専門とする障害者スタッフと、自分のお給料が2万円しか変わらない。みんな紙を折るのもゆっくりだし、でもある日、夜の会議にむけて空を見る余裕もないくらい忙しい時があったんです。そんなとき車椅子で24時間介護が必要な梶さんが『田岡さん、月がき



豊能障害者労働センターで定期発刊している『積木』。

「『積木』って教えてくれたんですね。その時、自分の心の余裕のなさから解き放たれるという開放感があるように感じました。」

「一般の工賃では、障害者が自立をすることはおろか余暇をもつこともままならない。センターでは会議によって、当人の生活を踏まえうえで給与が振り分けられている。もちろん8万9千円からの給与は決して高級とはいえない。センターの資金となる箕面市独自の補助金は、能力に目を向けた価値ではなく、障害者の働く権利を保障するものである。

利益を上げていくことのみでは、人は満足できないのだろうか。心にゆとりがあることの値打ちは、実際に体験したものにしか分からないのかもしれない。」

「森の中ではたくさんの生き物が共生している。」

「積木は、全国に発送します。僕は、機関紙の発送作業をコーディネートする編集委員です。」とセンターが発行する広報誌『積木』の責任者である障害者スタッフの荒木邦公さん。

「印刷から郵送までの作業は非常に段取りの多い仕事である。」

田岡「障害者スタッフが印刷の前に紙に空気を入れたりすることは難しいですから、紙さばき機を導入したんですよ。仕事をするための環境作りは熱心にしてますね。また通信販売の発送作業はご注文を受けてから発送するまで、検品の作業は各工程ごとにつっちり担当が決まっています。健常者が一人でするよりも正確なくらいだと思いますね。」

「記者さんと田岡さん、荒木さんの話をにこにこしながら聞いていた堀さん。堀さんの手には一枚の写真が握られていた。

「あ、これは去年の福井旅行に行ったときですね。みんなお酒飲んで（笑）。こうして毎年、スタッフで働いたお金で旅行に行くのが、とても楽しみなんです。」

「Tシャツを販売することになったきっかけとは。」

「きっかけは1988年に店を一件閉めざるをえなくなった時でした。特にTシャツにこだわっているわけではなく、ただTシャツが一番メッセージを伝えやすいから。神戸の復興のために何かしたいと思う当時の人の気持ちにフィットしたんだと思います。」

「阪神大震災の時に生まれたガッツ君と労働センター代表の小泉さんの『耕そう。希望を。』という文字をあわせた支援Tシャツは、発注が追いつかないほどである。店のスタッフで揃えたいという注文も。

「ただ、一発屋だと忘れられてしまう。私たちは震災のことを忘れてほしくない。だから息の長い支援をしたいと思って通信販売たちあげたんです。」

「Tシャツの売り上げの%を寄付するというのは、大きな決心のいることでもあったが、今では全国か

「みんながささえあって、一つの森を作っている。」



ガッツ君と「耕そう。希望を。」の文字。

ら注文が来る人気商品となっている。田岡さんはTシャツがメッセージを発信し、人々をつないでいる手ごたえを感じているという。

「ゆめ風基金について教えていただけますか。」

「ゆめ風基金は東淀川区に本部がある、被災地の障害者を支援する団体です。私たちがこの団体を信用しているのは、彼らが資金をプールせずに全額を必要とするところにすばやく届けてくれるから。彼らは神戸の震災から全国、都道府県全てに拠点を作りました、連携が早く情報が行き届いています。今回の震災でもすごい速さで新しく拠点ができていて、現地のニーズが一番わかっているんです。」

「障害者を取り巻く環境には、強固なネットワークがあるといえる。」

「私たちは、ネットワークを全国に広げていきたい。豊能障害者センターのように、障害のある人が事業を作っていくことを知ってほしい。『福祉の呪縛』という言葉があるのですが、健常者の給料が補償される一方、障害者には少ない工賃しか分配できない現状に満足してほしくないんです。鳥は天空へ、人間は社会へと私たちはいますが、社会に出て働く楽しさをひろげていきたいですね。うちは社会的企業といわれます。事業を通じて障害のある人が所得をもつことができ、箕面市内にある7つの拠点で、工員や店長として働くことで、お店に来たは障害のある人と顧客と店員として普通に接することができる。自然に町の中に

とけこみ、町を変えていくんです。今回の震災でまた急激にボランティアが増えました。現地は介護や下着の配布がまだまだ必要な状態です。Tシャツの注文は全国から来ています。」

—Tシャツにこめられた思い。

「今日、私が着ているTシャツのテーマは「いのちの森」です。（4年前のテーマ）森の中ではたくさん生き物が共生している。私が着ているのは猿の絵ですけど、他にふくろうがいたり、みんながささえあって、一つの森を作っている。別々の生き物は社会に生きる個性と同じなんです。普通、障害者の施設というのは同じ障害の人ばかりを集めるんですね。それは指導や訓練をする側の立場ゆえともいえます。でも、労働センターにはさまざまな障害のある人がおられます。入社したどの障害のある人にもできることが絶対あると考えています。障害者スタッフが他の障害者スタッフを助けあうことで仕事が回っているんです。」

—たとえば、知的精神障害があっても脳性まひの人をサポートできるといふことですか？

「そうなんです。お互いに補い合って、自分も役に立ってるんだってわかることで、存在意義を見出していく。よく、うちの事業所は誰が障害者で、誰が健常者かわからないって言われます。それはそうですね。障害者と健常者を分けずに「職員」ですから、そうやってどんどん、たくましくなっていくんです。私自身、ここに来たことでのままの自分でいいんだなと思えるようになりました。」

—前の職場では違いましたか。

「1980年から1990年ある電器メーカーにいました。当時は開発中の新商品のために必死でアイデアを出していた。競争に勝つために、力量以上に上を目指していました。家に帰っ



ても休まらないくらい。でも、労働センターに来た時、カレンダーの販売の営業のために必死で電話を掛ける私の姿を見て、障害者スタッフの藤沢さんが手紙をくれた。「無理しなくていいよな、私は私でいいよわ。」と気持ちに余裕が持てるようになったんです。」

—田岡さんにとってたくましさとは何ですか。

「人のことを考えられるようになること、ですね。たとえば、梶さんがいるだけで、お菓子の時間には、自分の分だけではなくて梶さんの分も、つて考えるようになる。指導する人がいなくなる、自分が考えようと思う気持ちを持てるようになるんです。」

—いつの間にか就業の17時を回っていた。取材班は田岡さん、梶さんにお礼を言い事業所を後にした。帰りの道中、記者達が今回の取材の感想を述べ合った。その中で今の自分達に照らし合わせるうちに一つの疑問がわいた。

《今、あなたの『主体性』はどこを向いていますか。》

障害者自身が主体となって事業をする、豊能障害者労働センターの取り組みは、環境に変化をあたえ、個人に、人のことを考える、たくましさ、を芽生えさせるという点が興味深かった。特に記者達の興味をひいたのは、周りと自己を比較しない自立した主体性のあり方である。

田岡さんは取材の後、自らが考えている、「主体性」についてこのように定義してくれた。「主体性」人間らしく生きる権利を守るために自らが行動すること。一般市場で障害者自ら業を起こし生活するために所得を作り出す活動をはじめた事業所の職員としての言葉である。現代は信賞必罰に基づいたモチベーションに限度をきかしている社会という一説もある。（*ダニエル・P『モチベーション3』より）

—ある種の行動に対して褒美を出せば、その行

動が増え、ある種の行動を罰すればその行動が減る。産業革命以来、人のやる気を誘導してきたモチベーションが今の社会には通用しなくなりつつあるらしい。

実際、何のために働くのかというのには記者達が直面している大きな課題の一つだ。ゆとり世代といわれる1987年以降2010年に卒業を卒業した記者達だが、「競争心がない」とは耳に痛い言葉だ。だが筆者もまた周りと競争をして勝ちぬくことが果たして重要なのかと疑問を抱く。田岡さんから聞いた話でも、どうやら「主体性」は競争に勝ち抜こうとする姿勢とは、比べられるものではないようだ。では戦う相手を求めない私達が持っている、「主体性」はどの方向をむいているのだろう。

—個人主義の若者が持つ、個別の目標だろうか、それとも今の社会に足りない、何か。だろうか。

英雄ティーシャツ

文：赤福餅太郎

Tシャツ好きの友人Aに聞いてみた、Tシャツの魅力。

「楽、めったにデザイン被らない、安い、なのにオシャレ度高い。」

そんな回答を寄せてくれた友人Aは、常にTシャツを愛用している。彼の家には古今東西から集められたTシャツが飾られていて、暗闇で英字が発光するものから、街で着たら捕まりそうな卑猥なものまで様々な種類がある。そんなAがある時東南アジアへ旅をしに行き、旅行先からスカイプで通話をかけてきた。

「すごいいいTシャツ見つけたからお土産に買って行くよ！」

フォレスト・ウィテカー似のタイ人が後ろを通り過ぎるネットカフェでハイテンションに言うA。

その時タイは大規模デモの最中で、広場では血をまく大騒ぎ。浮き足立つタイ人を尻目に、Aはケラケラ笑った。その数週間後、Aがタイから帰還した。マレーシアで現地妻を作り、毎月2万円送金するというとんでも話も一緒に。

帰還早々、Aから旅行の誘いがあった。なんでも後輩の車で九州に行くから一緒に行こうとのこと。出発は5時間後。風邪で寝込む中流石に無理があるとは思ったものの、風邪薬片手に5時間後には車に揺られていた。

「はい、これ！」そうやってAが手渡したのはピンクのTシャツ。全面の真ん中にはキューバ革命の英雄チェ・ゲバラの顔があらわれている。大規模デモが起きている国からの土産でゲバラとは、流石のA。僕に革命家にもなれと言うのだろうか。

「かっこいいじゃん！いいから、着て着て！」すでにネタなのか本気なのかすらわからないA。

だがそう言われ、グレーのパーカーの下にピンクのTシャツを着こむ。ちょうどジップの間からゲバラが覗き、実にチャーミングな仕上がりだ。Tシャツからほのかに香る洗剤の匂いは現地妻の洗濯で付いた残り香らしい。こうして、僕は2泊4日の強行日程を20世紀最大の聖像と共に歩むこととなった。フラワーフェスティバルに湧く広島、どんたくの活気ある福岡でも完全に異色のスタイル。中日、流石に耐え切れず、Tシャツを脱ぎ、普段の服装に戻った。パーカーの合間から覗くピンクのゲバラへの通行人の視線があまりにも痛すぎた。

広島のお好み焼き屋のおばちゃんにはクスクス笑われ、博多の屋台では知らないおっちゃんに「どげんしょつとばい」と心配までされた。こうして革命戦士ゲバラは後輩の車の奥にしまいこまれることとなった。

旅行から帰って数週間後、急にAから着信があった。

「とにかくこのURL見てくれ。」Aが送ってきたアドレスを開くと、あのゲバラTシャツの写真が飛び出てきた。Twitterに後輩が写真付きでアップロードしていたのだ。

以下、原文。

服の整理をしていたら、知らない服がいっぱい出てきた。こんなダサイTシャツいつ買ったんだろ。ゲバラって。。

Aはケラケラ笑いながら「あのダサかっこよさ、わかんないかなあ」と呟いた。複雑そうな顔でゲバラTシャツを掲げる後輩は滑稽に見える。そんな中、赤いキリストだけは、いつもどおり凛々しい顔つきで未来を見つめていた。なんとなく、ジョン・レノンがゲバラを最もかっこいい男と言ったのもわかる気がした。



Nao

さ か だ ち ご っ こ

Tシャツとは「(袖を広げた形がTの字に似てるのでいう)丸首、ニットのシャツ。元来、男性用下着で、1960年代後半より男女の普段着・スポーツ服などとして普及。」(広辞苑 第五版より)とある。そもそも下着として始まったとされているということは、本来は外には見えないものとして着られていた。飾りのない、最低限の形である『Tシャツ』。

この創刊号の制作に関わっている間、Tシャツについて色々と考えたり、Tシャツにまつわるエトセトラを思い出そうとした。私はTシャツが好き派なのだが、座談会の模様を読んでいると、誰でもTシャツが好きというわけではないということが分かった。誰でも気軽に着ることができて、好きだと思っていたのできっぱりと「嫌い」という発言が飛び出してきたのにはびっくりして、興味深いと思った。私は普段からラフな格好が多いからTシャツをよく着るけど、キレイ目な格好をしている女子はTシャツ自体をあまり着てないよなって思った。そもそも、好きでも嫌いでもどちらでもなく、動ける服だから着るといった概念もある。そう、Tシャツは「動ける服」なのだ。そして、他のTシャツを引き立たせるという服でもある。これは本来の形式に習って、下着として着るということに近い。現代はだまし絵やら、何やらとTシャツに描かれた絵や言葉、模様は多種多様。下着として始まったTシャツは現代において、コーディネートはさまざま。Tシャツを主役として着ることもしばしば。

Tシャツは無駄のない「T」というシンプルな形に、そこに描かれているもの次第でがらりと変わる。それが面白い。

ここ最近、Tシャツを買う機会が増えたように思う。理由はいくつかある。学生の頃、好きなデザイナーの憧れのブランドは高価なものが多く、手の届く価格ではなかったりした。そのブランドでもTシャツなら割と安く、アルバイトで稼いだ金額でも手の届く範囲のものがあった。だからTシャツを買ってみた。それがTシャツを買う機会が増えた一つの理由。今ではTシャツ以外の服を少しずつ買えるようになってきたが、それでもデザインの気に入ったものなら、Tシャツを買う。

舞台鑑賞やライブに行った際に、記念としてTシャツを買うことが増えたのも理由の一つ。感動した舞台のTシャツを日常で着ると、着る度にその感動を思い出す。そういうTシャツを日常に取り入れる、日常に溶け込んでいくことって良いなと思う。

好きなバンドのライブに行く機会が増えたのもTシャツを買う機会が増えた理由のひとつ。初めて行ったそのバンドのライブで、いろいろなグッズがある中、私はTシャツを選んだ。街の一角を切り

取った写真がプリントされたTシャツ。デザインが気に入って、衝動的に買った一枚だった。そのライブがきっかけで、そのバンドのライブへよく行くようになった。それまで、他のアーティストのライブに行ってもTシャツを買うことがあまりなかったのだが、グッズが発表されるとTシャツをチェックする「癖」がついた。ライブに行った記念や証を何らかの形で残したいのだと思う。ライブ会場意外でも、通販などで手に入る場合があるが、会場に行かないと買えないことも多い。そうすると、思わず買ってしまおう。それを着ることにより、この年の、このツアー(ライブ)に行ったのだという証にもなる。行ったライブのツアーを一番象徴し、目に見えるものがTシャツのように思う。でも、あまり気に入らないデザインの時は買わないのが私のポリシー。

感動したことは覚えておきたいし、感動したという証を残しておきたい。よく、ライブのTシャツは買ったけど家でしか着ないとか部屋着にしている人が多いけど、私は普段からよく着る。私だって可愛らしいワンピースやしゃっきりとした襟のついたシャツも着るけど(笑)、今日はロックな気分だからラフな気分だからかと思うと、Tシャツを主役に着たりする。基本的にはデスクワークなのだが、重い荷物を持つこともあるので、あまりにも繊細な服は着て行けない。時間のない朝、何を着て行こうか迷ったらTシャツを着ることも多い。

古着屋に行ったら、例えば〇〇年代のビートルズのTシャツが売っていたりしている。そうやって、時を越えて残る記念のTシャツって素敵だな、とも思う。見に行った演劇の舞台や音楽のTシャツが生活に溶け込むというのはかっこいい。

Tシャツそのものが一つのキャンパスのようであり、芸術のようである。豊能障害者労働センターの取材記事に登場するTシャツにおいても言えることだが、「Tシャツ」という形に絵を載せるだけで、メッセージを運ぶことができる。

この前、服の整理をしていたら大事そうにタンスの奥に仕舞われたTシャツが出てきた。高校時代、イベントの時に着たTシャツ。体育祭、文化祭、卒業公演(普通科ではない学科に通っていた)等で着たTシャツたち。わりと簡単に作ることでできるチームのグッズとしてTシャツがあった。Tシャツを見るだけで思い出が蘇る。それは写真と似ている。そのTシャツをチームの人たちが全員着ることで統一感が生まれる。団結の表れであり、チームの象徴となるのだ。バングアの取材記事にも登場したが、そのチームの象徴としての役割も果たすのである。

ファッションとしてのTシャツ、記念としてのTシャツ、象徴としてのTシャツ。時には人と人とを繋げることができる。このCHEMIRO創刊号において、Tシャツで繋がることのできた方々に心から感謝いたします。そして、このCHEMIROが人から人へと渡っていき、誰かの心を動かすことができたなら、嬉しい限りです。

「Tシャツ」に広がる世界は無限大。今日どんなTシャツを着ようかな。

文・写真 いろは

Tシャツ あれこれ

CHEMiRO

<http://p.booklog.jp/book/26120>

著者 : kuroudon

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/kuroudon/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/26120>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/26120>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.